

新課程移行期の 課題と実践

— 石川県立七尾高校の事例から —

10、12月号に引き続き、新課程移行期に特に浮上する課題に対してどのようにアプローチしているのか、学校事例を通して紹介する。
今号では、生徒把握を軸にして指導の改善を続けている石川県立七尾高校の事例を取り上げる。

「新課程への助走」コーナーで紹介した生徒把握の手法

中学校時点での生徒の把握

- ・ 中学校を訪問し、生徒の学力、気質、通学方法などをヒアリング【2011年10月号熊本県立第二高校】
- ・ 塾講師から通塾している中学生の実態を聞く【2011年10月号熊本県立第二高校】
- ・ 小中学校の教師を招いた公開授業研究会を開き、各学校種の状況と入学生の気質を把握【2012年2月号石川県立七尾高校】

導入期段階の生徒把握

- ・ 新入生に「生活進路実態調査」アンケートを実施【2011年12月号大阪府立吹田東高校】
- ・ 学習オリエンテーションで予習を体験させ、それを基にした授業を行い、家庭学習の重要性を実感させる。予習が出来、授業についてこられるかを把握する【2012年2月号石川県立七尾高校】

日々の指導の中での生徒把握

- ・ 「目線合わせシート」で時期ごとの面談テーマをすり合わせ、時期に応じた的確な生徒把握を行う【2011年10月号熊本県立第二高校】
- ・ 生徒→担任へ、担任→学年団・進路指導部へという「二段階の吸い上げ」で、生徒にかかわる全ての教師が生徒把握を行う【2011年10月号熊本県立第二高校】
- ・ 進路マップを活用し、学年の傾向と生徒個々の強み弱みを把握【2011年12月号大阪府立吹田東高校】
- ・ 進路マップの分析結果を「進路指導研修会」で全教師に情報共有し、学校全体で生徒を見取る【2011年12月号大阪府立吹田東高校】
- ・ 「家庭学習時間調査」で教科ごとの学習時間を把握【2012年2月号石川県立七尾高校】
- ・ 「生活・学習実態調査」で、教科のどの分野が分かっていないかなど学習の内容・質について把握し、教科担任による面談で更に詳細な生徒理解を行う【2012年2月号石川県立七尾高校】

『VIEW21』では、特集や当コーナーで新課程移行期の生徒把握の重要性を伝えてきた。左図は

組織的な生徒把握から
学校の取り組みを振り返る

当コーナーで掲載した学校の生徒把握の手法をまとめたものである。各時期、各校の状況に応じて有効だと思われる取り組みを考へ、生徒の気質の変化を丁寧に捉える体制を構築していきたい。

石川県立七尾高校

生徒の実態は指導の結果と捉え 学習時間や意識調査を行い 指導の改善に生かす

地域の拠点校として 全ての学力層に対応

石川県立七尾高校は能登半島の中央に位置する七尾市にある。能登地方の拠点校として、半島全域から生徒が通う。県内でも有数の進学校ではあるが、地域の過疎化や2006年度入試で石川県の公立高校の学区が撤廃された影響を受け、ここ数年、定員割れが懸念される状況が続いている。そのため、新入生の成績上位層は中学校時代に特に学習をしなくても上位を保っていた生徒がほとんどで、一方、下位層には塾での学習に

頼って高校入試を突破したという生徒が目立つ。成績層にかかわらず、家庭学習習慣が身に付いていないことが大きな課題だった。入学時からこうした生徒の課題を抱えつつ、地域の拠点校として進路実現を支援することが学校の責務であると、進路指導主事の石田秋雄先生は話す。

「生徒が自宅から通える範囲に4年制大はなく、進学すると一人暮らしは必須となるため、費用面においても国公立大志向は強くあります。特に、リーマンショック以降、その傾向は顕著になり、生徒も保護者も将来への不安から資

格や職業に直結するような進路先を選ぶ傾向が一層強くなりました。経済的な理由から、国公立大に合格できなければ資格が取れる専門学校に進むという生徒は珍しくありません。生徒の可能性を最大限に伸ばせる進路を実現させるために、学力を付けさせることが更に必要となっていたのです」

同校は、完全学校週5日制となった02年度以降、学習時間の確保という観点から試行錯誤を続けてきた。その結果、大半の生徒に家庭学習習慣が定着し、平日3時間、休日5時間の目標時間を達成するようになったという。03年度に始まった現行課程、県の公立高校の学区撤廃など、その時々の変化に対応しながらつくり上げてきた指導内容を紹介する。

毎日の家庭学習状況から 生徒の課題が見えてくる

同校は、家庭学習習慣の定着のためのさまざまな仕掛けを行う。入学1週間後に行う「学習オリエンテーション」では、家庭学習



石川県立七尾高校
石田秋雄
Ichida Akio
教職歴29年。同校に赴任して10年目。進路指導主事。



石川県立七尾高校
大西誠
Onishi Makoto
教職歴26年。同校に赴任して7年目。教務主任。



石川県立七尾高校
中澤賢
Nakazawa Satoshi
教職歴25年。同校に赴任して7年目。3学年主任。

石川県立七尾高校

◎1899（明治32）年開校。2004年度からスーパーサイエンスハイスクールの指定校。
◎全日制／普通科・理数科／共学／1学年約240人
◎2011年度の合格実績（現浪計）◎国公立大は北海道大、名古屋大、京都大、大阪大などに135人が合格。私立大は早稲田大、同志社大などに延べ376人が合格。

の重要性を伝えるために、予習の仕方を指導した上で実際に予習を取り組ませ、それを基にした授業を行う。3学年主任の中澤賢先生は次のように説明する。

「初めから家庭学習の目標時間はありません。予習、授業、復習という学習のサイクルを体験させ、国公立大に合格した先輩たちも同じように学習していたことを

伝えます。生徒は国数英それぞれに1時間は予習が必要だと実感し、家では3時間くらい勉強しなければと理解するのです」

4月下旬からは毎日、家庭学習時間調査を行う。毎朝、生徒は前日に家でいつ、何分、どの教科を学習したのか、就寝時刻と共に用紙に書き、担任に提出する。担任は一人ひとりのデータをパソコンに入力し、コメントを書いて放課後までに生徒に返却する。蓄積したデータは、個人、クラス、学年と異なる形で集計でき、生徒個別の学習時間の推移、各学級の学習時間の比較などにも加工できる。データは生徒への声掛けや面談に利用する。校内のパソコンはLANで結ばれ、教師は全ての生徒のデータを見られる。教務主任の大西誠先生は毎日の蓄積があるからこそ指導に生かせると話す。

「毎日入力していると、学習時間が減ったら悩みでもあるのではないか、教科が偏っていれば不得意教科から逃げているのではないかと、生徒の課題が見えます。また、グラフ化することで生徒の意

識は高まり、徐々に学習時間は増えていきました。今ではどの生徒も家庭学習の目標時間は達成しています。しかし、今度は時間は十分なのに成績の伸びない生徒の指導が課題として浮上したのです」

学習時間は確保されているのに学力が伸びない要因はどこにあるのか。その課題への答えを探そうと、毎日の学習時間調査にプラスして2か月に1度行っている生活・学習実態調査を工夫した。

調査内容は、1日の時間の使い方(平日・休日の教科別学習時間、起床・就寝時刻など)、学習に対する意識(定期考査対策の開始日など)、志望校の有無などである。学習に対する意識を尋ねる項目は、教科ごとに具体的な悩みを推測して選択肢を練った。回答からは生徒の学習の質を把握し、面談に上げるようにした。石田先生は面談の質が確実に上がったと話す。

「これまでは面談の中で悩みを聞き出してから助言をしていたため時間がかかっていましたが、調査によってすぐに核心に入れるので話をより掘り下げられ、アドバ

イスの幅も広がりました」

きめ細かな生徒把握により指導の質向上を図る

11年度は新たな試みとして、調査結果を基に面談で教師がどんな指導をしたのか記録する欄を結果データに設けた。これを蓄積し、同様の回答をした生徒の指導に役立てようという考えだ。

「課題別に指導を体系化できれば、学習の質を上げていくことが可能ではないかと、期待しています」(石田先生)

調査結果から同じ課題を持つ生徒が多いと分かれば、学年全体、学校全体ですぐに対策を立てることが可能となった。11月の調査で1・2年生では「学習の仕方が分からない」という回答が多かったため、放課後に3日間、学習法をテーマに教科担当による面談を行った。1年生は生徒個別に、2年生はLHRで用紙を配布して分からないことを書かせ、それを教科担当が見て、必要な生徒に面談をした。後日、再調査をすると「学

習方法が分からない」と回答した生徒が各教科で40〜60人減った。

「課題が明確に数値で表れるので、対策を立てようとした時に教師間の合意を得られやすいという利点もあります」(大西先生)

調査結果は個人票に打ち出し、三者面談にも活用している。

「生徒が抱える課題の原因は何かを、保護者に調査結果を示しながら話を進められます。子どもの書いた内容ですから、保護者は納得して話を聞いてくれます。成績が下がっている理由はこの教科の学習時間が減っていることにあるのではないかと、家庭での様子はどうかと、具体的な話が出来、家庭の協力も得られやすくなったと感じています」(中澤先生)

調査を頻繁に行う理由を、石田先生は次のように説明する。

「生徒の実態調査とよく言いますが、今の生徒の姿は私たちの指導の表れです。調査は教師の指導の成果を検証する場と捉え、調査結果は次の指導に生かすよう、PDCAサイクルを回していきたいと思えます」(石田先生)

図 週末課題の狙いと注意点、時間配分の一覧(2年生文系)

教科	科目	狙い	内容	時間配分	提出先
国語	古典	読解力養成。 基礎基本の復習	『応用古典』古文「15『増鏡』」、漢文「19『戦国策』」 ※しっかり読解しながら、未習得の文法事項、句法を覚えること	20分・20分	担当者
	現代文	読解力養成。 基礎基本の復習	『現代文長文演習』小説7『おしやれ童子』 ※取りかかりは「迅速に」、演習は「じっくりと」、手を抜かないこと	20分	担当者
数学	数学Ⅱ	基礎基本の定着。模試に向けて実力強化	今週も指数関数・対数関数。A問題+B問題 or B問題+C問題。1週間に1単元の復習。B・C問題は20~30分考え、思考を巡らせること ※土曜講座でC問題に取り組み、解答・解説を行う	60分	数学Ⅱ担当者
英語		読解力アップ 文法の復習	冊子を仕上げる。長文問題は選択になっているので、表紙をよく読んで、選択しなさい。ただし、難関大志望の人は三問とも解くこと。文法問題で分からないところがあれば、質問するように	90分	英語R担当者
理科	生物Ⅰ	遺伝問題をマスターする!	プリント1枚(答えは次週の最初の授業で配布)	15分	授業後集める
地歴	世界史B	基礎基本を固める!	プリント1枚	30分	授業後集める

*学校資料を基に編集部で作成

課題には狙いと注意点を明記し、意識を高める

調査を通して分かった生徒の氣質を生かした取り組みも始めた。

「本校の生徒は、自分が納得をしないと動かず、納得さえすれば背伸びをしても達成しようと頑張ります。そこで、学年集会で話す時や配布するプリントにも、その取り組みにどんな意味があるの

か、目的や狙いを明確に伝えるようにしています」

週末課題では、教科ごとに、狙い、注意点、時間配分の目安を明記し、生徒に配布している(図)。

「1年生から何事においても狙いを明確に伝えるように努めてきましたが、その成果もあり、3年生になって、生徒が物事の意味をよく考えるようになったと感じます。3年生対象の添削課題を見て

も、思考力や記述力に結び付いていると思います」(中澤先生)

定期考査では、各設問の狙いを明確にして作問し、試験終了後に正答率や平均点などから、狙いは達成できたのか、教科指導の自己分析をA4用紙1枚にまとめて、問題用紙と共に校長に提出する。

「今まで感覚的に捉えていたことを明文化し、狙いや生徒の抱える課題をより意識して授業を行うようにしています。また、授業や課題での指導の成果を確認できるような作問を行っていくことも方針としています」(大西先生)

このように、同校では一つの実践で完結させず、実践から新たな課題と目標を見いだす目標形成型の指導に転換しつつあるのだ。

新課程での共通課題を契機に小中高連携を進める

今後は、小中学校との連携を推し進める予定だ。学習習慣や学習姿勢などの定着は、高校の指導だけでは限界があると考えるからだ。11年度は七尾市内の全小中学

校に呼び掛け、公開授業を行った。研究テーマは「根拠と筋道を明らかにして考える力の育成」。新課程で小中高に共通して求められている言語活動や表現力の育成をテーマに掲げた公開授業が行われた。授業後には教科ごとに協議会を設け、小中高の教師が一堂に会して意見を述べ合った。

「小学1年生の担任の先生が国語の授業を見て、『授業に取り入れられる指導があった』と発言していました。小学校の先生が感じ取るものがあつたのならば、中学校の先生方にも影響を与えられる部分があるかもしれない。高校が中学校の実態を知ること重要ですが、高校のことをもっと知ってもらえるよう、次年度は他地域の小中学校にも声を掛けたいと考えています。また、石川県では、今後、団塊世代の大量退職に伴い、若手教師が増えていきます。新課程に対応した授業力の向上も課題となるでしょう。授業を見た他学校種の先生から指導してもらえ、これは、貴重な経験になると期待しています」(石田先生)